

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

あゝ、荒野【前篇】【後篇】

2017年・日本映画・前篇 157分・後篇 147分
配給/スターサンズ

前篇 2017 (平成 29) 年 10 月 28 日鑑賞
後篇 2017 (平成 29) 年 11 月 12 日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：岸善幸
原作：寺山修司『あゝ、荒野』（角川文庫刊）
出演：菅田将暉／ヤン・イクチュン
／でんでん／木村多江／ユースケ・サンタマリア／木下あかり／モロ師岡／高橋和也／今野杏南／山田裕貴／河井青葉／前原滉／萩原利久／小林且弥／鈴木卓爾／山中崇

👁️👁️ みどころ

カルチャーアイコン、寺山修司が書いた唯一の小説が『あゝ、荒野』。その時代は東京オリンピック開催直後の1965年だったが、映画は時代を2020年の東京オリンピック直後の2021年に。舞台は同じ荒れ果てた荒野（＝新宿・歌舞伎町）だが、その底辺に生きる2人の若者が求めるものとは・・・？

ボクシング映画として『あしたのジョー』（11年）や『ロッキー』シリーズと比較するのも面白いが、前後篇で5時間4分の本作では、時の社会問題あれこれもしっかり確認したい。さらに、少し女々しいようだが、2人の若者の恋人、母親、父親との繋がりも・・・。

「両雄並び立たず」は項羽と劉邦のようなケースにぴったりで、2人の悪ガキの8回戦対決ごときに使う言葉ではないが、本作ではなぜ「両雄」が戦ったの？そして、なぜ「両雄」が並び立たなかったの？それをしっかり考えたい。それにしても、久しぶりに素晴らしい邦画をたっぷりと鑑賞。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■カルチャーアイコン、寺山修司とは？■□■

1935年生まれの寺山修司は1983年に47歳で亡くなったが、1960年代後半から学生運動を中心にさまざまな社会的活動を展開した私たち「団塊世代」の文化面における象徴となった人物。彼はラジオ、テレビ、映画、演劇、ミュージカルの台本作家、詩人、歌人、作詞家、スポーツ評論家、政治評論家、演出家、劇作家、映画監督、エッセイスト、雑誌編集者、写真家、ゲームプランナー、ビデオ作家等々として活動したが、彼が主催した「演劇実験室◎天井桟敷」はとりわけ社会的に大きな影響を及ぼした。

私は特にそれ以上詳しく彼のことを知らなかったが、本作のホームページやパンフレットを読んで、彼が「時代の先駆者であり、今なお生き続けるカルチャーアイコン」とされていることを知った。また、彼の唯一の長編小説が『あゝ、荒野』であることもはじめて知った。

■□■原作と本作の時代は？その異同は？■□■

原作の時代の設定は、1964年の東京オリンピック直後の1965年。その舞台は、孤独と不毛の精神風土が宿る大都会新宿の片隅、歌舞伎町だ。1960年代後半の「ボクシングもの」の代表は、何とんでも『週刊少年マガジン』に連載されていた、ちばてつやの『あしたのジョー』。私は、『あゝ、荒野』のことを何も知らなかったが、なぜか50年後の今、その小説が映画化されたことによって、はじめて『あゝ、荒野』が「ボクシングもの」であることを知った。

1960年代後半は、50年代後半からはじまった高度経済成長政策と1964年に開催された東京オリンピックによる「日本民族の復興」によって、日本全体が大きく躍進した時代。そんな流れの中で『あしたのジョー』をはじめとする「スポ根もの」も大流行りになっていたが、その『あしたのジョー』も2011年には映画化されて、大きな話題を呼んだ（『シネマルーム26』208頁参照）。しかして、寺山修司の『あゝ、荒野』は一体どんな「ボクシングもの」？そして、なぜそれが今映画化されたの？

本作は、前篇157分、後篇147分の長尺だが、その時代と舞台はなぜか2020年の東京オリンピック直後の2021年の新宿に設定されている。登場人物やその周辺人物の設定も、かなり変更されているらしい。さらに、そんな時代状況（の変更）を反映して、本作ではさまざまな社会問題が描かれるが、本作に見るそれらの社会問題は寺山修司が原作で描いたものから大きく変更されている。

本作を鑑賞するについてはそんな異同を十分考えながら、『あしたのジョー』のような「スポ根もの」のボクシング映画とは全く異質の「ボクシングもの」としての『あゝ、荒野』をしっかり位置付けたい。

■□■若者の孤独は1965年も2021年も同じ？■□■

原作のメインキャストは新宿新次とバリカン建二という孤独な2人の若者。それは本作も同じだが、50年前の原作に見る2人の若者の孤独と本作に見る2人の若者の孤独の異同は？いかにも孤独で、『あしたのジョー』の主人公である矢吹ジョーと同じようなキャラの孤独な若者、新宿新次（菅田将暉）に対して、本作に見るバリカン建二（ヤン・イクチュン）は、新次より年齢が10歳も上。そして、父親によって韓国から無理やり日本に連れてこられた建二は、吃音で対人恐怖症の男。したがって、彼はガールフレンドはもとより、他者との関係をほとんど築けない孤独な若者になっていた。

前篇は、荒野（＝新宿）の中で孤独に過ごすそんな2人の若者を、元ボクサーの堀口（ユースケ・サンタマリア）が海洋（オーシャン）拳闘クラブに引き入れるというストーリーから始まっていく。この片目の男堀口は『あしたのジョー』における丹下段平と同じような役割で登場し、トレーナーの馬場（でんでん）と共に、新次と建二の「疑似家族」のような役割を果たすので、それに注目！

他方、前篇冒頭のシーケンスでは、振り込め詐欺をめぐる新次とその友人の立花劉輝（小林且弥）が、元仲間の山本裕二（山田裕貴）らと激しく対立し、殴り合うシーケンスが登場する。それによって、新次と裕二との対立がストーリー全体の核となるが、そこからヤクザ同士の抗争とならずに、ボクシング映画なところが原作と本作のミソだ。新次が少年院から出てきた時、既に裕二はプロボクサーとしてデビューしていたから、建二と共に海洋拳闘クラブに入った新次は、裕二への復讐を目指していかなる特訓を・・・？ そんなストーリーを見ていると、若者の孤独は「スポ根」に昇華されたかに見えるが、いやいや、荒野（＝新宿）に生活する新次の孤独はそれ以上・・・。そして、建二の孤独も、それ以上・・・？

■□■孤独を癒す恋人は？母親は？父親は？■□■

山田洋次監督の『家族はつらいよ』は、パート1（『シネマルーム37』131頁参照）、パート2（『シネマルーム40』未掲載）に続いて、現在パート3が作られており、今や平成末期を代表するファミリー映画になっている。

本作は、新次と建二の孤独がテーマだが、人間は1人で生まれてくるものではないから、本作にも新次の母親・君塚京子（木村多江）、建二の父親・二木建夫（モロ師岡）、そして新次の恋人の曾根芳子（木下あかり）等が登場する。しかし、新次と建二の恋人や、母親、父親との関係は、『家族はつらいよ』に見るホームコメディ的な「つらさ」とは根本的に違う、本質的根源的な「つらさ」なので、それに注目！

そして、前後篇あわせて5時間4分の本作では、迫真のボクシングシーンとは別に、新次と建二それぞれの恋人、母親、父親との人間関係が生々しく描かれるので、その「つらさ」をしっかり確認したい。

■□■社会問題あれこれ！1965年と2021年の異同は？■□■

1964年に開催された東京オリンピック直後の日本の社会問題といえば、70年安保改定問題とベトナム戦争反対問題、そして、それを大きくリードしたのが学生運動だった。また、その時代に書かれた寺山修司の原作では、大学生による「自殺研究会」なるものもあった。それに対して、2度目に開催された2020年の東京オリンピック後の社会問題として本作が描くのは、①自衛隊の海外派兵問題、②2011年の3.11東日本大震災の問題、そして、③「自殺研究会」から大きく形を変えた今日的な「自殺抑止研究会」等々

だ。

①は、バリカン建二の父親と新次の父親に何かの絡みがあったようだし、②では、今なおさまざまな心の傷を抱えている3. 11東日本大震災の被災者である曾根芳子やその母親セツ（河井青葉）が登場する。さらに、③では、前篇のラストに「自殺抑止研究会」を主宰する川崎敬三（前原滉）が、1970年11月25日に発生した三島由紀夫の割腹自殺事件を彷彿させるような形で（？）自殺するシーンが登場するので、それに注目！

これらの2020年以降に発生した日本の社会問題への目の付け方は、もちろん寺山修司のそれとは異なり、本作を監督した岸善幸の視点だが、50年前との異同を含めて、それらもしっかり注目したい。

■□■2つの試合に大興奮！とりわけ菅田将暉に拍手！■□■

ボクシング映画の代表は『ロッキー』シリーズ全6作だが、ストーリーのクライマックスを占めるシルベスタ・スタローン演じるロッキーのボクシングの試合はいつも迫力満点で、感動の涙すら溢れてくる。それは、『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）（『シネマルーム8』212頁参照）や、ラッセルクロウが主演した『シンデレラマン』（05年）（『シネマルーム8』218頁参照）、そしてミッキー・ロークが老いたプロレスラー役を演じた『レスラー』（08年）（『シネマルーム22』83頁参照）でも同じだ。『あしたのジョー』（11年）（『シネマルーム26』208頁参照）でも互いの限界まで肉体を改造したうえでの、山下智久（矢吹ジョー）と伊勢谷友介（力石徹）の対決は素晴らしかった。本作前篇における新次と建二の4回戦ボーイとしてのデビュー戦は、ちょっとした小手調べ程度のものだが、後篇における新次と裕二、新次と建二の2つの試合は大興奮まちがいなしなので、それに注目！

『息もできない』（09年）（『シネマルーム24』157頁参照）で長編映画監督デビューを果たしたうえで、本作では言葉の壁を乗り越え俳優として何とも繊細な役柄を演じ、さらに、1975年生まれという実年齢にもかかわらず、立派なボクサーとしての肉体を作り上げたヤン・イクチュンに拍手！他方、同じ時期に公開された『火花』（17年）では売れない若手芸人・徳永役を原作者又吉直樹と板尾創路監督の狙い通りに演じた一方、本作では本物のボクサーと変わらない肉体を作り上げ、2つの死闘で見事に勝利した菅田将暉の努力にも大拍手！

世界タイトルを3階級制覇している現WBAフライ級王者のプロボクサー井岡一翔は、幸せいっぱいの新婚生活の中、おいしいものの食べ過ぎのためかトレーニング不足となり、同級1位アルテム・ダラキアン（30＝ウクライナ）と12月31日に行う予定だった6度目の防衛戦をキャンセルすることになった。そのため、大晦日の楽しみが1つ減ったから、その代わりに今年の大晦日には本作のDVDを鑑賞してはいかが？

■□■若者のセックスは？試合前はセックス禁止だが・・・。■□■

『ロッキー』シリーズは、ボクシング映画であると同時に夫婦愛の物語。また、『シンデレラマン』や『レスラー』でも、中年男女の真剣な愛がボクシングやレスリングの物語を支える大きな下敷きになっていた。しかし、『あしたのジョー』における矢吹ジョーは、若いこともあって女に対して愛を求める気持ちは全く見せていなかった。それに対して、本作に見る新次は自分を捨てた母親との距離感が興味深い。口先ではかなり割り切っているようだが、さてその内実は・・・？

また、新次は人並み以上に健康な若者だから、性欲が旺盛なのは当然。したがって、前篇に見る芳子とのセックス描写は興味深い。こんなに便利にいつでも自由にセックスできれば男にとっては天国だが、さて芳子の方はなぜこんなにいつでもOKなの・・・？この2人のいかにもしっくりしたセックス関係は後篇でも続くが、それと正反対に女とのセックスが全然ダメなのが建二。女とろくに口もきけないのだから建二の周りに女がいないのは当然だが、後篇ではそんな内気で寡黙な建二に対して、西口恵子（今野杏南）がやさしくラブホテルにまで誘ってくれたので、やっと一安心。そう思っていたが何と、そこでも建二がギリギリのところセックスを拒否したから、アレレ？こりゃ、一体どうなっているの？

試合前のボクサーは、セックス厳禁！堀口からそう厳命されていたが、新次は完全にそれを無視。孤独なトレーニングの合間に芳子の部屋に飛び込み、束の間のセックスで欲求不満を癒やしていたが、その芳子もなぜかある日黙って部屋を引き払ってしまうことに。岸善幸監督は本作でメインのボクシング物語とは別に、そんな若者特有のセックスのあり方を濃密に見せてくれるので、本作ではそれにも注目！

■□■憎め！憎め！VS繋がり！どちらがベター？■□■

『息もできない』で脚本・制作・編集・主演を1人でこなしたヤン・イクチュンは、本作で「暴力！暴力！暴力！」の何ともすごい債権取り立て屋役を演じていたが、本作に見る建二役はそれとは正反対。そんな男が堀口の誘いに応じて海洋拳闘クラブに入ったのは、自分を変えたいと思ったからだ。しかし、人間の性格はそう簡単には変わるものではないから、デビュー戦での敗退は当然。その後の練習ぶりを見ていると新次と同じように一生懸命やっているのだが、何しろ人とケンカするのが苦手な内にこもる性格だから、そもそもボクシングには不向き。彼が一貫して求めているのは人との繋がりだが、そんなものは一体どこにあるの・・・？

それに対して、新次が海洋拳闘クラブに入り必死に練習しているのは、あくまで裕二を倒すためというより、試合で裕二を殺すためだ。そのため新次の合言葉は「憎め！憎め！」だが、建二にはどうしてもそれが理解できないらしい。しかし、「憎め！憎め」の精神で新

次が見事に裕二に勝利する姿を目の当たりにすると、建二の心境は・・・？

本作では、後篇の後半から始まるそこからの建二の心境の変化が興味深い。建二が海洋拳闘クラブを辞める決心をするについては、海洋拳闘クラブの二代目オーナーとなった石井和寿（川口寛）がえらく建二のことを気に入り、その「引き抜き」を図ったことも影響しているが、それはあくまで建二の心境の変化を後押ししただけ。建二は石井の世話で新たに入居したマンションの壁に新次の絵を描き、「憎い！憎い！」「殺せ！殺せ！」と言いながら、そこにパンチを繰り返して出したから、建二の人間的な変化はすごい。これなら新次との対決で、建二はいい勝負をするのでは・・・？私は一瞬そう思ったし、現に対新次戦ではすごいパンチを繰り返していたが、さて、その試合の結末は・・・？

■□■項羽と劉邦は「両雄並び立たず」だったが、本作は？■□■

『ロッキー』シリーズの第1作ではロッキーが凄まじい死闘で最強のヘビー級チャンピオン・アポロに挑戦し、タイトルを奪うストーリーが感動を呼んだが、第3作ではそのチャンピオンが、老いぼれたロッキーのセコンドになってヘビー級ボクサーのラングに挑戦するストーリーが面白かった。このように、かつてライバルとして戦ったロッキーとアポロが後には互いの心の絆を結ぶ盟友になるわけだが、それはシルベスタ・スタローンが書いた単純な発想の素人流の脚本のため。しかし、カルチャーアイコンと呼ばれた寺山修司の手で書かれた『あゝ、荒野』では、新次が「殺してやる」と意気込んで試合に臨んだ裕二との試合とその後の2人の人間関係は・・・？そしてまた、建二が生まれてはじめて自分の意思で戦う姿勢を見せ、重いパンチで新次を追い詰めていたクライマックスの試合の勝敗と、その試合後の新次と建二の人間関係は・・・？

「両雄並び立たず」の言葉は、天下の覇権を争った「項羽と劉邦」のようなケースにぴったりで、新宿歌舞伎町で生きるチンピラ風情に使う言葉ではない。また、新次と建二の試合は8回戦に過ぎないから、『ロッキー』シリーズで見たチャンピオン戦の15回戦と全く様相を異にするのは当然だ。しかし、逆にそんなレベルだからこそ、最初から打撃戦（どつき合い）になる。そして、その前半戦では低い姿勢からの建二のパンチの重さが目立っている。これには新次もタジタジとなり、矢吹ジョーバりのノーガード戦法を見せながら対応するが、これでは互いのダウンは必至。4回、5回、6回とラウンドが進むごとに2人の死闘が続いていくが、ラストに近づくスクリーン上では次第にスローモーションの映像が増え、新次の内心の叫びを見せてくるように変化してくるので、それに注目！

そんな手法の是非の判断は難しいところだが、そこに見る建二の心の叫びを聞いていると何とも切なくなってくる。そして、ラストに向けて一方的にサンドバッグのように新次から打ちのめされる建二の姿を見ていると、つい涙が溢れ出てくることに。さあ、その結末は如何に・・・？

小池百合子東京都知事が国政に進出するべく自ら立ち上げた「希望の党」の代表を、約

2ヶ月足らずで辞任してしまったことを受けて、都政全体の運営にも暗雲が立ち込めてきている今、2020年の東京オリンピック開催時には彼女は都知事も辞任し、知事が交代しているのでは？そんな現実的な心配（論点）も含めて、2021年の「荒野」におけるボクシングにかけた2人の若者の生きざまをしっかりと検証したい。

2017（平成29）年11月17日記



『あゝ、荒野』
画・王雅（2018. 5）